妻有物語
北川フラム

「妻有物語」は日本列島の、都市化する時代ではある意味で奇跡のように存在している越後妻有という世界有数の豪雪地でありながら、辛苦の末に類い稀な米どころとなった地域を、宙に漂う空気膜のなかに定着させた仕事だった。

それは身近にいて、いろいろなことを見、聞きしていた父親が亡くなった際、父親の関係者とやりとりするなかで、父親の固有な思いは、どんな家族でも決して知ることはできないと気付いた息子の想いのようなもので、万象は映されていながらも。父親の原像は、手の届くほどの宙に浮きながらも、空気の球のなかにしかないといった類いのものだ。

そんなイメージはユートピアと言うしかない。

山野草の春の芽吹き、岩走る夏の清流、黄金色の稲の輝き、冬の白一色の絶対的抽象の世界。あるいはそのなかで助けあって生活してきた集落。棚田、瀬替など信じられない労苦のなかでの生活。その地は市場経済、効率第一主義、グローバリゼーションのなかで押しひしがれながらも必死に展望を拓いている。そういうことはいろいろ言える。がそれらの地誌、気象、歴史、生活をいくら述べても全容は伝わるわけはない。その時、人は宙にミラーボールのように気球を飛ばすしかないのではないか。榮榮、映里の写真はそのように見えた。

越後妻有トリエンナーレ2012の「大地の芸術祭」で彼らの仕事は、山を越えた今は廃校になっている小学校の体育館のなかで圧倒的だった。天井から吊り降ろされる地域伝統の布地を思わせるメッシュにプリントアウトされる風景は、そこに登場する人間を包摂しながら、情熱的にしかし静謐に宇宙に浮いていたのである。それは記憶というにはあまりにも生理的で、空間的に彼方まで拡がるイメージだった。

（大地の芸術祭ディレクター）